

地域に伝わる伝説や民話、文化財などを紹介

にしあいづ物語100選

その65

文：長谷沼 清吉

どろぶ 泥浮の開村

漆窪の泥浮地区は、アメリカのペリーが浦賀に来航した嘉永6年（1853）、平明村の徳右衛門が30町歩を譲り受け、家族とともに開拓の鋤を入れたのが始まりとされています。

「泥浮」の地名は、隣村の立岩へ行く道のそばに浮島のふかふかした湿地があったからといわれています。平明との行き来は新村堤と松坂を通っての道で、泥浮との往来ができるようになるのは戦後のことになります。

徳右衛門は気性の激しい人といわれ、開拓に精魂を傾け、その功績に「会津」の名字の使用を願い出ましたが、「会津とは畏れ多きこと、会沢を許す」との逸話が残っています。

泥浮の南で東と西の沢が合流して井谷川となるので、会沢の名字になったのかもしれませんが。実家の薄を名乗らなかったのは、名実ともに独立して新天地を拓く決意のあらわれがあったのではないのでしょうか。その後、徳右衛門は文久3年（1863）年に亡くなります。法名「開翁理發清信士」。

戊辰戦争の農兵組立によると、『高郷村史』には泥浮分肝煎会沢次右衛門、『山都町史』では会沢四左衛門とあり、徳右衛門の子と思われます。慶応4年（1868）、柴崎に上陸した西軍の一隊は井谷と赤岩・中山で戦い、一部は井谷から泥浮に進み、道案内を立てて富士山に登り、攻撃しています。

明治2年（1869）、新潟県白根村の平治は、泥浮にある岩穴でにせがね贗金を作り、処刑されています。泥浮と立岩を結ぶ道の脇に腹切り松がありましたが、虫食いで倒れてしまいました。平治が腹を切ったからだといわれています。しかし、罪人は斬首なので首切り松というべきですが、自ら腹を召したからでしょうか。



今月の表紙

今月は、こゆりこども園のスイカ割りより。熱中症対策のため、日差しの少ない曇り空の下、屋外でのスイカ割り。園児たちの元気いっぴいで楽しそうな声が園庭に響き渡っていました。

（7ページに関連記事）

編集後記

この度の豪雨により被害に遭われた皆さんに心よりお見舞い申し上げます。

近年、全国各地でこのような豪雨災害が多発しています。このような自然災害がいつ発生しても対処できるように、日頃からしっかりと防災意識を持ち、対策を考えておくことが必要です。

町では、「西会津防災マップ」を作成しています。町ホームページでご覧いただけるほか、町民税課窓口でも配布しています。この機会に災害への対応や備えについて考えてみませんか。（秦）